

Title	テリアカ考(三)(終回) : 文化交流史上から見た一薬品の伝播について
Sub Title	The Theriaka : a historical study of an antidote
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1966
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.4 (1966. 3) ,p.1(435)- 39(473)
JaLC DOI	
Abstract	This is the last part of the monograph about the theriaka (treacle), a famous antidote invented by ancient Greeks. This part is composed of five sections. The first and the second ones deal with the routes of the diffusion of this drug in the societies of Medieval Europe, and the writer thinks that the main route should be from the arabian medical world through Spain and Italy, especially Sicily. The third section, "The Portuguese and the Theriaka in India ", quotes some paragraphs of " The Simples and Drugs of India" by Garcia da Orta (c. 1490-c. 1570), and the writer tries to show the diffusion of the theriaka in the Islamic society of India during the 16 th century. The fourth section is assigned to this antidote brought by the Portuguese to Japan in the 16 th century. Finally in the fifth section, the last and the longest, the writer discusses about the theriaka brought by the Dutch during T.okugawa Period, and also about the works concerning this medicine, wrote by several Japanese scholars. Especially, the writer introduces two interesting manuscripts preserved in the Library of Kyoto University. Both of the two are anonymous. But the first one seems to be written by a Japanese scholar who learned medicine from some Dutch physician who came to Nagasaki probably in the period from the 18 th to the first half of the 19 th century, and the contents of this manuscript are the prescriptions of twenty-six kinds of theriaka. The second one is the very naive translation into Japanese of an advertising statement of a pharmacist of Venice probably in medieval age. The writer guesses that the translator of this note has the possibility to be identified with one of Yoshio family, very renowned lineage of interpreters of Dutch language at Nagasaki and represented by Kogyu Yoshio (1724-1800) who flourished during the second half of the 18th century. In the conclusive part of this essay, the writer expresses his astonishment at the fact that such a superstitious drug as the theriaka could be so highly estimated and expanded among the peoples of Europe, Asia and Africa for nearly two thousand years, in spite of the amazing development of human knowledges and civilizations.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660300-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660300-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# テリアカ考 (三) (終回)

——文化交流史上から見た一薬品の伝播について——

## 前 嶋 信 次

### 目 次

- 一一、ヨーロッパに於ける普及
- 一二、ヨーロッパ伝播の経路
- 一三、葡萄牙人とインドのテリアカ
- 一四、南蛮人が本邦へ伝えたテリアカ
- 一五、オランダ人将来のテリアカ

### 結 語

註、一—五〇。

### 図版目次

- 一、京大図書館蔵蜜方録所収「底野迦方」第一葉。
- 二、京大図書館蔵脚気方論所収「底野迦方」第一葉。
- 三、京大図書館蔵「底野迦名義」第一葉。

### 一一、ヨーロッパに於ける普及

本稿その二では、主としてイスラム世界におけるテリアカ流布を考察したが、この薬はまた中世のヨーロッパでも盛に行われたものらしい。このことを示す資料は夥しい量に上るものと思われるが、ここにはただ二三の例をあげるだけにとどめておきたい。

米国ノース・カロライナ大学の中世史教授 Loren C. Mackinnay 博士が一九三七年に「野口英世レクチュア」のひ

とつとしてボルチモアのジョンズ・ホプキンス大学出版部から出した「中世初期の医学」の中で、メロヴィンガ朝時代のことを述べ、そのころの教皇のひとり大グレゴリウス（在位五九〇—六〇四）はいくつもの奇蹟物語を書いたが、その中には当時の医術に関する貴重な断片が含まれていることを指摘している。それによると、この教皇は、およそ病氣とその治療とは全く神意の支配するところであるという信念を抱いていたが、さらに聖者マルタンの墓地の土埃をいれた聖薬などに絶対的の信用をおいていた。こういうものを万病薬として盲目的にほめたたえた讃歌をもつったといい、そのラテン語原文と英訳文を示している。

de Miraculis Sancti Martini

O theriacum inenarrabile. O pigmentum ineffabile. O antidotum laudabile. O purgatorium, ut itadicam, caeleste, quod medicorum vincit argutias, aromatum suavitates superat, unguentorumque omnium robora supercrescit! quod mundat ventrem ut agridium, pulmonem ut hyssopus, ipsumque caput purgat ut peretrum.

聖マルタンの奇蹟より

あわれ 万全のテリアカよ、

あわれ 言語を絶する染料よ

あわれ いみじき解毒剤よ

あわれ、この下剤、われは譬えて天国のものと言ふべきか、医師らの敏き薬よりさらに効き、その甘さ、もろもろの香料をも凌ぎ、あらゆる膏薬の力をば凌ぐこと遙かなれば。

そはアグリディウム（薬草名）の如く腸を浄め、ヒソップ（香草名）の如く肺を清くし、ペレトルム（薬草名）の

如く脳を洗う。<sup>(1)</sup>

右の如くゴレゴリウス教皇は聖マルタンの墓場の土を、効能万全の *theriacum* (テリアカ) にも譬えているが、これは、その当時、西欧で、テリアカが靈藥として尊重されていたことを示す一例と見てよいと思われる。

また同じく *Mackinnay* の書にはシャルトルの町が中世のフランスにおける医学の重要な中心であったことを述べ、そこで一〇〇六年から一〇二六年まで司教の職にあったフルベール *Fulbert* も有名な医人であったことを記している。フルベールの書簡によると、彼は医の道を一つの「学」*science* とは考えず、素人の道楽としての、一つの「術」*art* と思っていた。しかし、その邸宅には立派な医療室があつて、その設備のことを、他の一司教にあてて詳細に書き送つたものが残っているとのことである。その中の一節に

「……………三種のガレンの水薬と、同じ数の *diatesseron-theriac* (ディアテッセロン・テリアカ) を送ってあげましょう。これらの薬の効能や服用法などは、貴方のお持ちの解毒法の書を御覧になればすぐおわかりになるはずです。下略」  
という一節があるが、そのあとの所で、フルベール司教は、これらの薬の外、約九十種のいろいろの薬品を所蔵している旨を記している。<sup>(2)</sup> 右の書簡の原文はラテン語で記され、「同じ数のディアテッセロン・テリアカ」*totidem theriacae diatesseron* と云う言葉を用いているが、*diatesseron* というのは、テリアカの種別を示す言葉と思われる。いずれにせよ、その当時、フランスでテリアカが解毒剤として利用されていたことを示す一証である。

イタリアのカステイリオニ *Arturo Castiglioni* の医学史<sup>(3)</sup>のうち、中世末期の数世紀のことをあつかった部分に大略次のような叙述がある。

「この期間を通じて最も流行した薬はテリアカ (*theriacum* 又は *triacum*) であった。このものは古代史家の所伝によればローマ皇帝ネロの侍医 *Andromachus* が発明したものであるというが、別説には *Mithridates* の発見する所で

あるという。この薬の調合法は、青銅板に刻したものが、ギリシアのエピダウロスの（医神）アスクレピオスの神殿中にあるといわれている。この不思議な薬について書かれた文献は、そのみで一つの文庫を充たすに足るほどであるが、極めて多数の薬品を調合したものであり、これら薬品は時代と場所によって変化している。しかし、その根本をなすものは毒蛇の肉で、このものはあらゆる毒物に対して特効薬と考えられてきたのである。ベネディチェンティ Benedicenti はその著書中で、この薬についてまことに興味深い一章を費しているが、それによるとアンドロマコスのテリアカは五十七種の物質から成り、その調製はまことに難しく、あくまでも特殊な熟練を必要とするものであった。されば十五世紀のヴェネチアでは医師や薬剤士たちの Priorie Consiglieri の前で（仏訳本によれば修道院長たちや医師、薬剤士たちの代表者たちの前で）調製されたのである。ボローニアでは、arch-gymnasium（大体育場？）の中庭で、公衆の前で調製されたのである。コッラーディ Corradi がピサとフィレンツェ二市の薬剤士の法規を研究した書によると、テリアカは公衆の目前で調製すべきものであつて、しかも『薬剤士たちが医師や、この技術の権威者たちすべてとの協力のもとに』作るべきものであったのである。また町の役人（consul）たちの認可がなくては販売することは出来なかった。テリアカには、いくつもの擬造品が現われた。その中のひとつにオルヴィエタン（Ferranto d'Orvieto がつくり、十七世紀に流行した薬品名）があるが、このものが売りひろめられたのは、ずっと後世になってからである。テリアカはヨーロッパ全土で熱心な需要があつて、ヴェネチアはそのため極めて多額の取引をしたし、またこの薬品の利を独占しようとして警戒怠るところがなかった。<sup>(4)</sup>」

右は中世後期においてヴェネチア、ピサ、ボローニアその他イタリアの各都市でテリアカの調製が盛に行われ、その需要もきわめて多かったことを説いたものであるが、この薬の流行は、もっと時代が下って十八世紀ころに至っても依然として下火にはならなかったらしい。そのことについてカステイリオニは、右の書の「第十八世紀」の項中で左の如く説

いている。

「化学および植物学において長足の進歩をとげたのかかわらず、製薬の方は、この世紀の間に、到達してもよいはずの大きな進歩は果さなかった。そして、十八世紀の薬局において最もよく使用された薬品の目録（これら薬局の中ではイタリアの諸薬舗が最も国際的な名声を勝ち得ていて、ヴェネチアやジェノヴァ、ローマなどで調製された諸薬品は海外にも大量の販路をもっていた）を一覧するものは誰でも、およそ医師たちや一般民衆の好みは、なにか奇異な材料を練り合わせたもので、その効能のほども疑わしいような諸薬に集中していたことを理解するにちがいない。大いなる権威をもつ学者たちは、テリアカだとか、ざりがにの目玉だとか、真珠、毒蛇の肉その他もろもろの物質を薬として用いることを非難したのであるが、それにもかかわらず、これらの薬品は依然として広い販路を持ち続けたのである。しかし、十八世紀の終りころになると、新式の諸薬品が世に知られるようになり、世人も速かにその効能の高いことを認めはじめた……」<sup>(5)</sup>

こうして新時代の薬品が続々と現われはじめたけれども、テリアカその他、中世以来の諸薬もにわかに忘れ去られることはなかった。十九世紀に入ってもなおその末ごろまで民間にはかなりの勢力を持っていたらしい。

ヨーロッパでさえ、このような中世的要素がさらに遅くまで保存されてきたイスラム社会などではなお更のことであった。その一例として、アラビアの奥地あたりでは、これがまだ珍重されていたらしいことを一八七二年にネジド高原をさまよった英国の詩人ダウティが伝えている。その年、彼はジャバル・シャンマル地方のハイルの町を訪れ、イブン・ラシード家の英主ムハンマドと会ったが、ある日、宿舎で日中の暑気をさけていると、突然ムハンマド王が、そこを訪れて

“And thy medicine are what? hast thou tiryâq?”

とたずねた。ダウティは“what is tiryâq?”と思わず問いかえしたが、すぐそれが、英国で父祖たちが treacle と呼

んでいた解毒剤であることを思い出し

“I remember, but I have it not, by God there is no such thing.”と答えた。すると王と一緒に来たその近臣のひとりスレイマーンが“Khalil has plenty of salts Engleys—hast thou not, Khalil?”と云うのであった。ハリールとはダウティがアラビアに潜入するにあたって用いた仮名である。ハリールは沢山のイギリス塩をもっている、な、そうではないかとかばって云ったのであるが、ここにイギリス塩と呼んでいるのは、マグネシア（苦土、酸化マグネシウム）のことである。そこでダウティはアラビアのこの英主が、そんなにも中毒の心配をしているかと思うと、どうしても微笑の湧くのを禁じ得なかったと記している。<sup>(6)</sup>

この記録は、まだそのころ中世風に毒殺などが頻繁に行われていたアラビア奥地の貴族社会の一面を示すとともに、テリアカが解毒の妙薬として尊重されていたことを物語る有力な資料の一つとして利用してよいかと考えられる。

## 一一、ヨーロッパ伝播の経路

ヨーロッパ社会にテリアカが普及した経路については、二つのものが考えられる。ひとつはギリシア医学から直接に、またはローマ医学を経て伝わったのではないかという考方と、もうひとつはイスラム医学を通じてとりいれたのではないかという考方である。この辺の詳細な事情はよく知ることが出来ないが、右の経路の双方から伝わったと見ることも可能であろう。いずれにせよ、イスラム医学が西洋の近代医学の発達に大きな寄与をしたことについては、あらためて述べるまでもない。このことについては、すでに多数の先人の研究が発表されているが Max Meyerhof の説によると、<sup>(7)</sup>ラテン語訳によってイスラム医学がヨーロッパに移植されはじめたのは大約西暦一一〇〇年ころからで、その頃、歐洲の医術は迷信に支配され、科学的潮流は乾きあがっていた。僅に南イタリアのナポリに近いサレルノの町にギリシア医学の伝統

を維持する医学校があり、十一世紀から十二世紀にかけて栄えた。この学校にチュニジアのカルタゴ生れのコンスタンチヌス（通称アフリカのコンスタンチヌス、一〇一〇頃生—一〇八七歿）というものが身を寄せたが、もとはイスラム教徒であり、バグダードで医学を学び、のちにキリスト教に改宗して、ベネディクト派の修道僧となった。イタリアに来てからはサレルノとモンテ・カッシーノの僧院の間を往来し、アラビア語の医学書をラテン語に訳した。はじめはヒッポクラテスやガレンなどギリシアの医人の著書をアラビア語訳本からラテン訳したが、次にはイラン系のハリー・アッバスの「王書」*Kitab al-maliki* を訳した。これらはサレルノ学派の人々を通じて、歐洲各地に紹介された。コンスタンチヌスの訳には誤謬が多く、あまり評判はよくないというが、その訳業は一〇七〇年ころから、その死の年まで約十七年間も続き、ギリシアやイスラムの学術を中世ヨーロッパに移植した先駆者として大きな役割を果している。その弟子 *Johannes Affiacius* なども、アラビア語の諸文献をラテン語に訳した。

スペインではイスラム学術の中心であったトレドが一〇八五年にキリスト教徒の手に回復されたが、それから後、その地のユダヤ教徒やアラブ化したスペイン人（モサラベ）たちの協力によりイスラムの学術がラテン語に訳出されはじめた。トレドに来て、アラビア語文献の翻訳で名をなした人々の中では英国の *Adelard of Bath* が特に有名である。またユダヤ教からキリスト教に改宗したスペイン人 *Petrus Alphonsi* は英国に行きヘンリー一世の侍医となる一方、その国にイスラム医学を伝えたが、アデラードもアルフォンシもともに十二世紀前半に主な訳業を行い、多数の弟子を養成している。

よくトレド学派の訳業は、アッバース朝盛時のカリフ、アル・マアムーン時代のバグダードにおけるギリシア語文献のアラビア語訳と比較されている。そしてトレドにおけるアラビア語文献のラテン語への翻訳の業は十二世紀中が最も盛で十三世紀になっても継続したが、最も有名な翻訳者の中にはユダヤ教徒の *Avendeth* やクレモナーのジェラルド



Gerard of Cremona などがあつた。後者は一一一四年にイタリアに生れ、トレドに来て一一八七年に世を去るまでに約八十部のアラビア語文献をラテン語に訳したといわれ、また多数の門下生を養い、ヨーロッパに於けるアラビア学の父と称えられている。このジェラルドが訳したものの中に、ヒポクラテス、ガレンなどの原著をフニン・イブン・イスハークがアラビア語に訳したもの、アヴィセンナの浩瀚なカーヌーン（医学基典）などもあるが、更にスペインのアラブ医学者 Abulcasis の名著もあつた。その他にもアラビア語医書の翻訳者として、トレドの Marx、トルトーサのアブラハム、ジェノヴァのシモン、バレンシアの Berengar Villanova の Arnald（一二三三年死）その他の名がよく知られている。シチリア島は一〇九一年にノルマン人が征服するまでに百三十年間にわたってイスラム教徒が支配していたが、キリスト教徒の支配下に戻ってから後も、イスラム文化は愛好され、保護された。この地方にはギリシアの学芸の伝統もあつたので、スペインのトレドにおける如く、アラビア語文献のラテン語翻訳が行われるとともに、ギリシア語文献のラテン語翻訳も行われた。ただし十二世紀中は医学の分野では、さして目ぼしい訳業は現われなかったが、十三世紀の後半に入り、アンジューのシャルル王の治下（一二六六—八五）にギルゲンティの Farragut という偉大なユダヤ教徒の翻訳者が出現し、アル・ラージー（ラージェス）の大著 *Continens* (al-Hawī fi'l-Jibb) を数十年を費して訳出した。またパレルモのモーセや、ミカエル・スコット Michael Scot（一二三五年死）の如き卓越した翻訳者も出ている。

十字軍の影響で、イスラム諸学の移植が行われるに至った実例としては、僅な数しか伝えられていない。しかし十三世紀にヨーロッパ各地に病院が設立されたことについては、十字軍の影響する所が多かったことが認められている。ダマスクスにザンギー朝のヌールッ・ディーンが建てたビーマールスターン（病院）や、カイロにマムルーク朝のカラーウーンが営んだ病院などが、それらの模範となつたらしいことも論ぜられている。

またピサ、ピストイア、パドア、ヴェネチアなど北イタリアの諸都市にもギリシア語やアラビア語の医書をラテン語に

訳す学者たちが、かなり多数現われた。たとえばピサの Burgundio は一一八〇年ころガレンの十書をギリシア語から直接にラテン語に訳し、ピストイアの Accusius は一二〇〇年頃、やはりガレンの医書をフバイシュのアラビア語訳からラテン語に、一二五五年に Bonacosa はパドアでアヴェロエスの書を、一二八〇年ころ Paravicinus は Avenzoar の書をヴェネチアでそれぞれラテン語に訳したというが、その外にも無名の訳者により、マイモニデス、アヴィセンナ、ゲベル、ラーゼス、アルハゼンなどのアラビア語医書がそれぞれラテン語に訳されたという。このような訳業は十六世紀まで続き、一五二〇年に死んだイタリアの Belluno のひと Andrea Alpago はアヴィセンナのカーヌーン（医学基典）その他の翻訳で令名があり、それより更に時代が下る翻訳書も、なお歐洲の各大学でひろく使用された。マイヤーホーフは、これら数百種のギリシア・アラビアの文献はヨーロッパの不毛の科学土壤に降った慈雨であったといっているが、アフリカのコンスタンチヌスの影響のみをあげても、サレルノから数世代にわたる優れた医学の師たちが現われたのである。そして十二世紀以来、ボローニア、パドア、モンペリエー、パリーなどに続々と大学が設立され、新しい学問の中心となった。アラビア語学術書よりも、ギリシア語の学術書の方が尊重されはじめたのは十六世紀からで、北イタリアがその先駆であった。そしてアラビズムに対し、ヘレニズムの勢力が盛となり、一五三〇年から一五五〇年の間に、アラビズムは殆ど致命的の打撃を受けた。コペルニクスが天文学に改革をあたえたのと時を同じくして、パラケルススが錬金術と医学とを改新して、学生たちにガレンやアヴィセンナを棄てよと呼びかけはじめた。そして一五四三年ころをもって医学の中世時代は終り、それとともにアラビア医学の直接的影響も終末を告げたといつてよいが、それ以後とて、なおこれに固執する学者も少なくなかった。ことにアラビア薬学の方は十九世紀のはじめまで生き続け、一八三〇年ころまでセラピオンやメスーエの薬物書が歐洲の薬剤士たちによって学習されていたとい<sup>(10)</sup>う。

本稿第二、第九節にのべたパリーの国立図書館に所蔵されるアラビア語のテリアカ絵本なども、もとはパリー市内の某

薬剤士が所有していたものであるというが、これは昔のわが国の薬屋が中国の薬物書などを利用していたのにも比較することが出来るであろう。

右のように概括的のことを述べたのは、アヴィセンナのカーヌーンをはじめ、ラテン語訳されたイスラム医書にはテリアカのことを記したものが多くから、それらの訳書によってこの薬のことが中世ヨーロッパに広く知られたのであろうと推察されるためである。その具体的の一例としてスペインのアラブ系医人アブルカシスの書のことを挙げる事が出来る。Abulcasisとはアブール・カーシム Abū al-Qāsim のラテン語なまりで、いわゆる通り名であるが、本名はハラフ Khalaf ibn 'Abbās といい、アラブ世界では、その出身地の名をとって、アッ・ザフラウィー al-Zahrāwī と呼ばれている。<sup>(11)</sup> コルドバのウマイヤ朝の英主アブドル・ラフマーン三世が都の西北郊に営んだ離宮の町アッ・ザフラウ al-Zahrā' で生れたからである。その生年は西暦九三六年またはその後、数年の間だろうとされるが、はっきりしたことはわかっていない。<sup>(12)</sup> コルドバのカリフの侍医を勤めるかたわら、その名著アッ・タスリーフ al-Taṣrif li-man 'ajiza 'an al-tālif (医学万般のことにつき医師たちが参考すべき資料) を書いたと云っているが、この書は普通は略して単に「アッ・タスリーフ」とか、「ザフラウィーの書」 Kitāb al-Zahrāwī' 「ザフラウィーの大書」 Kitāb al-Zahrāwī al-kabīr などと呼ばれている。<sup>(13)</sup>

この書がクレモーナのジェラルドによつてラテン語に訳されてから、著者アブルカシスはヨーロッパ学界で有名となり、イスラム医学者中、ラーゼスやアヴィセンナ、眼科のアル・ハゼンなどと並んで、第一級の巨人とされるようになった。けれどその名声は外科手術の分野においてであつて、外科では他の追隨を許さぬ大家とされたのである。

つまり、クレモーナのジェラルドが十二世紀後半にトレドでラテン語訳したアッ・タスリーフは、同書の第三十巻のみであり、それは焼灼、切開、抽出、穿孔その他の外科手術を説いた部分であつた。この第三十巻は当時のヨーロッパの外

科医たちにとっては、まことに優れた指針となったから、著者アブルカシスは外科の大家として有名となったのであるが、タスリーフという書（全部で三十巻、写本で千五百頁程）としては最後の一卷のみにすぎず、第一巻（総論）、第二巻（病気の分類や症状）などを除くと、第二十九巻までは主に薬物やその用法などが説いてある。第三十巻はいわばアブルカシスの学問体系の一部を示したものにすぎないのである。

この書のうち特に私の興味を惹くのは、その第四編であって「大テリアカ al-tiryāq al-kabir と他の諸テリアカの調製法、ならびにすべての毒物に有効な薬品類」と題してあるものである。<sup>(14)</sup> 大テリアカは別にアル・ファールーク、またはファールキーなどとも呼ばれるもので、その製法はすでに本稿第四節で記した如くであるが、アブルカシスはこれの調製法を七段階にわけて説き、八十四種の薬物を練り合わす過程を詳述している。またテリアカの本来の目的は解毒剤として用いることにあるので、この篇の後半には、テリアカ以外の解毒薬をも列挙し、その用法を説いている。

右の如くジェラルドの訳出したのはタスリーフの第三十巻のみであったが、その他の部分も後に、多くの翻訳者によってラテン語その他の言葉に訳された。テリアカとその他の解毒剤のことを説いた部分も、中世後期を通じて、ひろくヨーロッパ諸国で利用されたとのことである。たとえばサレルノのニコラウス Nicolaus Salernitanus はその「解毒剤論」 Antidotarium にタスリーフを無断のまま豊富に引用し、中世後期を通じて名著として広く利用されたという。<sup>(15)</sup> また一九八年に Johannes Tetrapharmacos はその「解毒剤論」 Antidotarium のうちにタスリーフの一部をラテン語に訳したといわれている。<sup>(16)</sup>

右の如くアブルカシスのタスリーフ中のテリアカの調製や解毒薬の部分は中世後期のヨーロッパ各地で大部利用されたらしいから、イスラム医書を通じてテリアカの製法がヨーロッパに拡まったと見ることは充分の根拠があると考えられる。

### 一三、葡萄牙人とインドのテリアカ

インドでもテリアカはひろく用いられたらしいが、これについて詳しく調べたことはない。かの地にもイスラムの医術がひろまったから、恐らくこれとともにテリアカも流行したものであろう。十六世紀の中ごろ、インドに永年滞在し「インド薬物問答」*Coloquios dos simples et drogas he cousas medicinaes da India* という名著を書いた Garcia da Orta は、彼が滞在したころのインド各地でテリアカが珍重されていたことを伝えている。オルタのガルシアは、一四九〇年頃、スペインとの国境に近いポルトガルの Elvas で生れた。スペインの諸大学で医学を修め、リスボン大学で講師を勤めたのち、一五三四年三月、リスボン出帆、九月インドのゴアに着き、後にポルトガルのインド総督となった Martin Afonso de Sousa づきの医師として勤務するかたわら、ディウ、アハマダーバードなどを訪問し、またアハマドナガルを都とするバハラーム・ニザーム・シャーと親交を結び、その侍医をつとめたこともある。またコーチンやセイロンなどをも訪問した。インド滞在、ほぼ三十年、その間の研究をまとめたのが前記の「インド薬物問答」で一五六四年二月にゴアで在職中世を去った総督 Dom Francisco Coutinho にデディケートされた。ガルシア・ダ・オルタの親友中には大詩人ルイス・カモエンス（カモンイシ）もあった。一五六一年にマカオの配所からゴアに帰ることを得たカモエンスは、しばしばオルタの家を訪れて、その蒐集品や書庫を讚美したといわれている。インド薬物問答の初版は一五六三年四月にゴアで印刷された。ガルシア・ダ・オルタは一五七〇年ごろ、ゴアでその世を終ったが、医師としてインドで暮すこと結局三十六年に及んだ。私が所有しているのは一九一三年の Clements R. Markham の英訳本で *Colloquies on the simples and drugs of India by Garcia da Orta* と題し、一八九五年にリスボンで刊行された Conde de Ficalho の註釈本に基いている。この英訳本は二百五十部の限定版で、私のものはその第二一二番であるが、昭和二十年に戦火に

かかる直前の丸善の古書部で入手したものである。

この書の「第四問答」は *anomo* (*anomonum*) (和名ガジュツまたはウスグロ) についてであるが、その中で、問者ルアーノ Ruano は

「……………世人の話によりますと、アモームムは *tiriaca* (テリアカ) の中にいれられるとのことでした。こういう理由で *Mateolo Senense* はアモームムを失ったため、人類は滅び去るだろうと嘆いております。と申しますのはこのものが無くては、人間の諸病を癒やすすべもなくなるからであります。この著者(マテオロ、セネンセ)は、この薬がアンドロニコスのテリアカに入れられるかどうかは断言出来ないとも申しております。このことのために、彼はある著述家たちから非難を受けていますが、その理由というのはつまり彼が、ある題目のもとではアモームムはテリアカの中に入れられると述べ、また他の題目のもとではその反対のことを云っているからだと彼等は主張しているのであります。マテオロはまたこれに代るべさ薬を示すことなく、ただアモームムを失ったことを嘆き、さらにかの「エリコの薔薇」と呼ばれるもの(薬草名。学名は *Anastatica Hierochundina*、通称は聖母マリアの花。パレスチナに生じ、イエス・キリストの誕生のとき咲き匂っていたと伝えられる)もアモームムの代りとはなり得ないとつけ加えております。(中略) 貴方は御自身で、アモームムを御覧になったかも知れぬし、また *Laguna* やその他の人たちに見せてもらいかも知れません。たしかに、多くの著述家によると、このアモームムはテリアカに入れられるとありますが、正体のわからぬ薬を試みるのは良いことではありません。一体、アモームムはこの国(インド)にあるのでしょうか。またイスラム教徒の医師たちは、それを *pes columbinus* (学名 *Geranium dissectum*、通称、鳩の足。フウロソウ、ゲンノシヨウコの類であろう) と思っています。国王たちの病気を治しているのでしょうか。もしそうなら前に申上げた学者たちが証明したように、それは大きな誤謬ですが、この点について私は是非とも知りたいという強い望みをもっているのです」

これに対してオルタは次の如く答えている。「もしこの国で、ヨーロッパの貴方の国にあるような薬草類を、私が見かけましたならば、貴方の疑問をとり去ってあげますよ。何故かといって、私はこのインドについて知っていることは何でも貴方に御話するつもりなのですから。現代の著述家たちはテリアカというものはアモームムがなくては造れないと云っております。かつてスペイン語を話すが、宗教はユダヤ教をあやまって奉じているある薬剤士で、自らエルサレムから来たといっているものに、一体アモームムとは何かと訊ねて見たことがあります。そのひとの申しますには、それはアラビア語でハマーマと呼ぶもので、その意味は「鳩の足」であり、自分はそのものをよく知っているが、自分の故国で見たので、この国(インド)においてではないとのことでした。(筆者註、正しくは *Rijl al-hamama* と呼び、またシンジャー、カハラ、フマイラーなどとも呼ばれる。薬草の一種)このことについては何の疑いもありません。その後数年して、私が *Nizamoxa* (アハマドナガルの王バハラーム・ニザーム・シャー) のところに参りましたとき、その侍医たちにアモームムを持っているかどうかと訊ねたことがあります。彼等は自分たちの国には、それは見あたらぬと申しました。しかし、トルコ、ペルシア、およびアラビアなどから、この王のもとにもたらされ、侍医たちが処方をするために必要なので、高い値段が支払われているところの他の諸薬品にまじって、アモームムも来ているとのことでした。これらの処方の中にはミトリダート *nitridato* (原註、西紀前二〇年にポントスの王ミトリダテス・エウパートルの毎日の服用のため処方されたテリアカ) もありました。彼等は私に若干量のアモームムをくれましたので、ゴアに持ちかえて、薬剤士たちに見せましたが……「鳩の足」と同じものであるよう見うけられました。」

またルアーノが

「その王はアモームムを何に用いているのですか」と問うたのに対し、オルタは次の如く答えている。

「ミトリダートに入れるのです。毒がこわいので、この煉薬の需要が甚だ多いのです。そして侍医たちは封印したこの

薬をいつも自分たちの手元においているのです。この国のこれらの王たち、いやむしろタイラントだちといった方がよいが、これらはしばしばその同胞たちを毒害する風習をもっているのです。私はかの王と、ある日のこと会談しながら、彼等がどのようにしてテリアカを調製するかを発見しようと努めてみました。王が申しますには、それは樽につめられ、その実験をする人物がついて、もってこられるのだということでした。もしそれが本物だったら、王はそのテリアカ (Teriac) を全部、それと同じ目方の黄金で喜んで買いとるのですが、その実験をさせる場合は二千パルダオスほどかかります。この額は一スペイン・クラウン貨にあたります。確に、悪魔にでもそのかされぬ限り、王はその約束通りに実行するのですよ」

ルアーノいわく

「テリアカはヨーロッパの方が廉価ですね。多量にありますから、その安価なことは驚くべきです……下略」<sup>(17)</sup>

ここに出てくるアハマドナガルのニザーム・シャーは、Nizām al-Mulk と呼ばれ、オルタと親交があった人であるが、彼の王朝（ニザーム・シャーヒー朝）は一五〇八年から一六〇七年まで続いた。当時それらの王朝にはムスリムの侍医たちがいて、アラビア医術をもって奉仕していたのであるが、かれらは中東地方製のテリアカをとり寄せて、王たちに進めていたものらしい。しかし、ルアーノが云っているごとく、それらはインドでは大変に高価であった。そして、そのころ歐洲では、かなり廉価にテリアカが売りさばかれていたのである。

ガルシア・ダ・オルタは、さらにその書の第十七問答、コスト Cost (アラビア語 qust、わが国にも奈良朝時代から青木香の名で舶載され、正倉院御物のうちにその実物が保存されている。とくにインドのコスト qust hindi はイスラム世界やヨーロッパでも有名であった) の項の終りの方で、再びテリアカのことと言及している。

ルアーノ「何か特にお試めしになった薬がありますか」



オルタ「若干あります。テリアカを症状に応じ、葡萄酒または薔薇水、あるいは肉桂などともに服用させてみました。すでに申上げた Pão de cobra や Unicornio (一角獣の角の義、犀角のこと)、あるいはまた毒矢の傷にもよく効く粉末にしたマラッカの contra erva (pão de Malaca de contra erva と書く) なども用いました。けれど、何よりもすぐれた薬は bezar 石 (牛黄。牛、山羊、羊などの体内の結石、北アジアのジャダ) を三粒服することで、このものをペルシア人は pazari (pad-zahr、毒消しの義) と呼んでいます。(中略) 私はマラッカの司教にこのベザール石とテリアカとを服用させ、大変によい結果を得ました。充分に排泄させたのち、多量のテリアカを灌腸薬の中に入れて用いるとよいのです」

ルアーノ「私はこれらの病氣に対し、テリアカを灌腸剤の中に入れて用いるということはまだ見たことがありませんが」オルタ「中毒性の諸病にかかっている場合に、患者を納得させ、こういう薬をあたえるのは愉快です。私はそのようにして、かの王の収入監督官を中毒性の下痢から治しました。はじめは私の同僚の侍医たちは中々同意しませんでしたかね。けれど結果が良いのを見ると彼等は喜び、それから後、多くの人びとにこの療法を試みたものです」<sup>(18)</sup>

さらにもう一箇所、第十六問答のココ椰子の項で、オルタがココ椰子の油は解毒剤として効力があり、また腹痛、中風、神経疾患などにもよいというが、自分は試みたことではないと語ると、ルアーノが

「貴方は御自分で実験されたことがないといわれますが、はなはだ怠慢でいらっしゃる」。オルタは答えて

「私が実験したことがないのは、その機会がなかったためであるし、もっとよい薬品、たとえば牛黄、テリアカ、捺印粘土(ギリシアのレムノース島の粘土)、pão de cobra, pão de Malaca de contra erva などがあるためです。これらは効能が多いと認めていますので、そのほかのものまで試そうとは思いません」<sup>(19)</sup>といっている。

当代一流のポルトガルの医人ガルシア・ダ・オルタがテリアカを医療に用い、その効能を信じていたことが、これらの

対話によつても推察し得る。ポルトガルのみでなく当時、この薬はひろく歐洲の医人たちに用いられていたのである。

#### 一四、南蛮人が本邦へ伝えたテリアカ

ポルトガル人は十六世紀中ごろから、わが国をも訪れるようになり、後奈良天皇の享禄三年（一五三〇）に豊後に来たかの国の商船や、同じく天文十二年（一五四三）に大隅の種子島に漂着して鉄砲を伝えたポルトガル人、天文十九年（一五五〇）に平戸に来たものなど、ようやく頻繁となり、さらにフランシスコ・シャヴィエルの渡来（一五四九）とともにキリスト教の布教もはじまった。南欧の医術も、キリスト教の普及にともなつて、わが国人の注意をひくようになった。

最も早く西洋の医学でわが国人に深い印象をあたえたのは、リスボン生れのルイス・デ・アルメイダ Almeida, Luis de (1524—1584) という商人だった。この人については海老沢有道教授「切支丹の社会活動及南蛮医学」（昭和十九年刊頁五八—）に詳しく説かれているが、富士川游博士もこの人の事蹟を説いて「コレ実ニ西洋人ガ我ガ邦ニ来タリテ医術ヲ施シタル嚆矢ニシテ、コノ時我ガ邦人ノ之ニ從テ方伎ノ術ヲ学ビシモノ必ズ之アリシナラン」と云っている。<sup>(20)</sup> 関場不二彦博士によればルイス・デ・アルメイダが豊後の府中（大分）に病院を建てたのは一五五七年であつたというが、この病院には、彼の教をうけた日本人も数名医療に従事していたのである。またアルメイダの活動範囲は豊後府中・五島・志岐・天草・摂津・大和・山城・薩摩その他に及び一五八四年（天正十二）に平戸で病歿したといわれている。<sup>(21)</sup> おそらく、テリアカなどをも医療に使用したのではないかと思われる。かつて唐朝の中国を経て、古代のわが国にも知られていたギリシア人のテリアカは、こんどは南欧人によつて再びこの国に伝えられたと云つてよいであろう。

有名な「日本史」の著者ルイス・フロイス Luis Froes は永禄六年（一五六三）に日本に渡り、織田信長が永禄十二年に京都に南蛮寺を建てた際はグレゴリオ・デ・セスペデス Gregorio de Cespedes とともに医術に精しいため、患者

の治療にもあたったということである。南蛮寺は天正十六年(一五八八)に豊臣秀吉の命で破壊されたが、彼等の医術は、その弟子等により、大阪・堺・地方に遺存することを得たといわれている。<sup>(22)</sup>

富士川博士も「南蛮人ガ布教ノ方便トシテ施セル医術ハ、耶蘇教嚴禁ノ後ト雖モ、大阪・堺・長崎、ソノ他ノ地方ニ行ハレ……」と記し、杉田玄白の蘭学事始に「……其邪教の事は知らざる所の他事なれば論なし。但し其頃の船に乘来りし医者<sup>(23)</sup>の伝来を受けたる外科の流法は世に残るもあり、これ世に南蛮流とは云うなり」とある一節を引いている。

それではこれらポルトガル人によってテリアカがわが国にもたらされたという明証があるか否かという問題であるが、岡西為人博士の「中国本草の渡来と其影響」によると、わが国の戦国時代に薬材が中国船や葡萄牙船によって輸入されていたことを説き、「葡船がもたらした薬材には中国薬のほか<sup>(24)</sup>に南蛮薬もあったが、その中には例えば……」として、カンプラ(樟脳)アネシ(大茴香)ウニカウル(犀角)ヘイサラ・バサラ(鮐荅)などとならべて「テリアカ Theriaca 底野迦」をあげている。またこの記述は村上直次郎博士の「南蛮医学の伝来に就て」(日本医学史学雑誌、一三〇六号、昭和十七年)から引用したこともことわってある、(明治前日本薬物学史第二卷、頁一六一—六二)

右の一例のみによっても葡人がテリアカをわが国に舶載したことは疑ないと思われる。

## 一五、オランダ人将来のテリアカ

ポルトガルの医術について、オランダのそれが伝えられたが、この方は徳川幕府時代を通じて行われ、その影響するところも、前者にくらべ、さらに深くまた広汎であったごとく見受けられる。

寛永十八年(一六四一)にオランダ商館が平戸から長崎の出島に移されてからも、医師一人は必ず交替して在留し、医療を施すことを許されたので、通詞の中にはこれらに従って、その医術を伝承したものが少くなく、いわゆる和蘭医方が

鎖国時代にもかかわらず興ることができたのである。<sup>(24)</sup>

テリアカの製法や使用がこれらオランダの医師たちによって、わが国に伝えられたことについては、かなり多くの証拠を挙げることができる。

たとえば江戸時代に公けの蘭医として始めて来朝（一六四九年）したカスパル・スハンベルヘン（ジャンベルゲン）Caspar Schanbergen は約一年間、長崎や江戸に滞在したが、これについて学んだ人びとも少なくなく、いわゆるカスパル流外科医術とよばれるものが残った。その流れを酌んだ吉永升庵（一六五六一一七三五）はその子升雲と「阿蘭陀外科正伝」を著わしている。全十二巻よりなり、その第六巻は「衆薬功能及び修合部」と題し、外科に応用する薬物二十五品の名と、それぞれの調合成分を掲げたものであり、その首が「安牟登炉摩扁蕤天狸谷阿家」で関場不二彦博士の指摘したごとく<sup>(25)</sup>アンドロマコス<sup>(26)</sup>のテリアカのことにちがいない。ここに伝えられたテリアカの成分は僅に八薬にすぎないというから、かつての大テリアカ（ファールキー）などに比してよほど簡単である。吉永父子は寛文元年（一六六一）に来朝したアルマンス・カアツ Allmans Katz の教を受けたという。<sup>(26)</sup>しかし、所伝にいうが如くカスパル・ジャンベルゲンから直接に教を受けたということは年代上から一寸首肯しかねる。<sup>(27)</sup>なおアルマンス・カアツは寛文二年（一六六二）九月、わが国より祖国に帰る途中、シャムの近海で難船して死んだ。<sup>(27)</sup>

また前野良沢（一七二三—一八〇三）に「底野迦真方」の著があったというが、<sup>(28)</sup>良沢はその三十数種の著書の大半を家に蔵して人に示さなかったといわれ、この書もまた散佚に帰したものとと思われる。

「蘭学事始」その他の著で有名な杉田玄白（一七三三—一八一七）にも「的里亜迦纂稿」一巻の著があつて、写本によつて現存し、昭和四〇年七月二十八日から八月一日まで日本橋の三越本店で開かれた蘭学事始一五〇年記念「蘭学事始展」に出品され、その時の目録にも載せられている。

興味深いことは吉永升庵父子が「天狸谷阿家」としるし、杉田玄白が「的里亜迦」と書いているのに対し、前野良沢は「底野迦」と記し、唐代の底野迦が後世のテリアカであることをはっきりと認めている点である。本稿第一で、ヨーロッパで底野迦がギリシア人のテリアカであることを明言したのはドイツのフリードリヒ・ヒルトが最初（一八八五年）であることを記したが、それより百年以上もはやく、早くも前野良沢が同じ意見を示しているのである。

これに続いては小野蘭山（文化七年—一八一〇—八十二才で歿）の「重訂本草綱目啓蒙」（四十八卷。弘化四年—一八四七—上梓。もと口授したものといわれている）の第四十六卷獣部底野迦の条に「紅毛人将来する薬にテリアギア或はテリアギヤと云ものあり。底野迦の音近し。今はテリアーカと云。紅毛人の伝うるテリアーカの法数品あり。六十余味なるものあり。蝮蛇<sup>マムシ</sup>一味にて製するものあり。七味にて製するものあり。四味にて製すものあり。貧者テリアーカと云十四味にて製するものあり。今は此品を製して世に弘むるもの多し。テリアーカは万寿盗典に德里亜格二匣と云。職方外紀に的里亜加と云。今舶来に品あり。色黒き煉薬にして硬きもあり、柔なるもあり。古渡には赤色を帯るもあり、新渡には味甘く、油臭あるもあり。惟味苦く久して燥かざるを良とすべし。」とある。<sup>(29)</sup>

蘭山は京都の人、寛政十一年、七十一才のとき江戸に入り、前記の如く八十二才で世を去ったというが、この人もまた唐代の底野迦とオランダ人のもたらしたテリアギア（テリアカ）とが同一物であることを知っていたのである。

またこれよりやや遅れて江戸の医人勝成裕もその著「中陵漫録」でかなり詳しくテリアカの製法を説き、これを「底野迦方」と呼んでいる。文政九年（一八二六）の夏に中島嘉春がこの書の序文を書いているが、それによると勝成裕は東は陸奥・出羽から西は四国・九州まで五十余国を跋涉し、薬草木数万品を採集し、また長崎に滞在して唐山紅毛の商客からその土風を聞き、薩摩に往って琉球人とまみえて、その習俗地形を訪うたとある。その書の卷十に「底野迦方」と題し左の如く記している。<sup>(30)</sup>

「其方甚だ多し。諸藥を末して蜜に相和したるを、都て底野迦と云。乃本草獸部に載る処の、底野迦是れなり。是を試るに、効驗あるものあり。或は功なきものあり。功なきものは方異りて、亦其症に相応ぜざる故なり。余蘭人に就て問い、又吉雄及沢家の秘方を尋て、ここに正す。必ず症に随てえらび用ゆべし。

一方

洎夫藍六錢、蝮蛇首尾を去て霜とし一匁、阿片漢渡六匁、沒藥、丁子、竜腦、赤石脂各六匁、右六味極末として蜜にて和調、石臼にて擣事、一千杵、密器に貯て白湯にて下す。凡小腹の痛及疝並痲の類、婦人腰痛及血症一切に用て効驗あり。

又方

百藥煎五十目、反鼻四十目、乳香焙て珠となし五錢、丁香焙り二錢、木香霜とし四錢、百合三錢、沒藥十錢、右七味末となし、蜜を入れて能相和して擣事一千杵、凡腹部の病、仙積等せんしやくに用て効あり。

又方

重樓金銀、白芷各四分、麒麟血五分、洎夫藍さふらん、丁子各一錢、阿片二分、良姜、竜腦、沒藥、石硫黃各二錢六分、蝮蛇八錢、桂枝二錢三分、右十二味を細末して、蜜にて相涸擣き、仏手柑の汁一錢五分を加入して、又能擣べし。凡心煩しく或吐或瀉し、頭痛發熱して、夜寢ざるに用て大に効驗あり。

又方

洎夫藍四錢、石硫黃、桂枝、竜腦、蚤休、沒藥各八錢、白芷四錢、赤石脂十六錢、丁香三錢、蝮蛇二十四錢、良姜少、右十一味を末し、蜜にて相和し、後仏手柑の自然汁を入れて、阿片少を加て、火にて煉膏のごとくして、器中に貯うべし。凡天行時疫の類は、姜汁を加うる事一錢、是を服して自汗出る。諸邪伏熱を退く。又胸膈鬱塞を開、嘔吐泄瀉の症皆

効驗あり。

#### 四味方

菌桂、和のタモノ実、馬兜鈴、竜旦、

右四味碎細して蜜にて煎煉して、手を休まず膏の如くす。毒虫の類には伝べし。又服して食毒を解す事妙なり。是を名付て四味の底野迦と言、甚だ便利にて旅行の際必携べし。

#### 单方

蝮蛇首尾と皮及腹を去て、其心と肝を留て、細に刻し、石臼にて擣き、一二日を過して、上好の煉蜜を下し、文火にて煎煉し、手を休ずして焦熬せしむる事なかれ。是を単方の底野迦と言、凡小児の諸症、及痘疹に用て拔毒す。其他の諸の病に効驗なきはなし。以上の諸方の効能記しがたし。只本書に説く処のごときをしらしむ。(このあとに本草綱目中の底野迦の条をひいている)

右の内、「四味方」とよばれたものは本稿第一の第四節「アラブ医家の伝えたその製法」の中で紹介した「四色のテリアカ」<sup>(A)</sup>「Tiryāq al-arb'a」と殆ど同じ材料を用い、同じ製法である。

ナジュムツ・ディーン・マハムードがその著書中で示した「四色のテリアカ」<sup>(A)</sup>の材料と勝成裕のあげた「四味方」<sup>(B)</sup>のそれとを比較すると左の如くである。

A、ギリシアりんどう B、竜旦

A、ザルーワンド(うまのすずくき) B、馬兜鈴

A、月桂樹の実、 B、菌桂。

A、半透明の没薬、 B、和のタモノ実

A、以上を細粉にし三倍量の泡立つた蜜でこねあわす。

B、碎細して蜜にて煎煉し、膏の如くす。

かくの如くギリシア伝来の四色のテリアカが、アラブ世界で行われ、さらにオランダを経て、徳川時代のわが国に殆ど変化することなく伝わったということは誠に興味深く思われるが、ひとつにはこのテリアカがわずかに四種の材料を蜜で練り合わすという、かなり簡単な製法だったためもあるであろう。大テリアカ（ファールキー）の如く、数十種の薬品を練り合わせて作るものに至っては、時代と場所によって、その材料にかなり相違が生じたものらしい。

また松岡玄達（一六六八—一七四六）の「用薬須知」後篇第四卷（宝暦八年—一七五八）には番薬類の中に「テリアギヤ」（<sup>31</sup>テリアカ）を挙げている。また現在、長崎図書館其他に保管されている「村上文書」（昔時の長崎の薬種問屋村上家の記録）によると、文化・文政以降嘉永・安政年間までに於て取扱った和蘭薬物の中に、文化元年（一八〇四）以降取扱ったものとして

「ウンカウル、サフラン、サボン、テリヤアカ」の四種をあげているが、<sup>32</sup>右の四種は数百種に達した同家の輸入薬品中、筆頭に記されたものである。

また松平定信（一七五八—一八二九）の手沢本に「阿蘭名目録」という一書があり、これに「年々持渡阿蘭陀商売之名目」として輸入品目を原語と国語を上下に対照せしめたものがあり、その中にも

テリヤアカ

がはいっていると清水藤太郎氏「薬物需給史」にある。清水氏によれば定信の老中在職は天明七年—寛政五年（一七八七—一七九三）であるから、この手記は、宇田川槐園が「西説内科撰要」（一七九三）<sup>33</sup>を著して初めて西洋内科を紹介したころのものであるという。



更に京都の薬種問屋某家に「正味帳」と題する帳簿が現存し、明和五年（一七六八）から慶応元年（一八六五）に至る九十九年間に同家が取扱った薬品の品目数量を記録しているが、その中には洋薬もかなりはいっており、天明六年（一七八六）の分に「テリヤアカ」があげてある。<sup>(34)</sup>

文政六年（一八二三）にはオランダ政府は博学なドイツ人シーボルト博士 Philipp Franz von Siebold を日本に派遣した。その年八月に長崎に到着、文政十二年まで七ケ年にわたって長崎市外鳴滝で医学、動植物その他の学を教授し、好学の医人たちが赴いてその門下に学んだ。門下として湊長安・伊東玄朴・高野長英等六十余名が知られ、交友の人びとの中にも間宮林蔵、最上徳内、宇田川榕菴、箕作阮作、福地源一郎、大槻玄沢その他の名士が多かったから、彼のが国の医学界に及ぼした影響はきわめて大きかった。このシーボルトがわが国人に教えた薬物の中にもテリアカがはいっていたことについては、明かな証拠が残っている。

その門人のひとり高良斎（名は淡、一七九九—一八四六）の「薬品応手録」は、シーボルトが、歐洲にて慣用した薬草類にして日本にあるもの、またはその代用品、及び二三の新輸入薬を選び、高良斎に翻譯せしめ、大阪にて出版したものであるというが、その中にも「テリアク（底里亜迦）」<sup>(35)</sup>がはいっている。シーボルト門下で最も薬物に精通したのは高良斎と高野長英とであったというから、長英もまたテリアカのことなどによく通じていたのであろう。

大槻玄沢（磐水、一七五七—一八二七）は杉田玄白の門に出で、「蘭学階梯」「六物新誌」その他の名著を残したことは周知のことであるが、「磐水存響」中に「西賓対晤」という六回にわたってオランダの医官と会見した記録が収められている。関場博士によると、そのうち寛政十年（一七九八）の会見は Herman Letzke という医官のものであり、そのときの質問中には解剖、頭部創痕に発毛せしめる薬品、ヒポクラテスのこと、「テリアカ」、舌疸、人参その他のことがあり、これらについてのレツケの応答に就て玄沢はその浅学を指斥しているとある。<sup>(37)</sup>

富士川游博士は「医史漫録」中で「徳川氏中世の頃に至りて、和蘭人の来往が頻繁となるに従い、凡百の薬方が我邦に輸入せらるるに方りて「テリアク」も亦、蘭方医家薬籠中のものとなり、解毒の神丹として、又痘疹積聚等の疾病を治するの薬方として功能神の如しと賞賛せられた。それにつきては鈴木素行の「底里亜迦考」宇田川槐園の「的里亜迦方」などの著述がある」と述べている。<sup>(38)</sup>

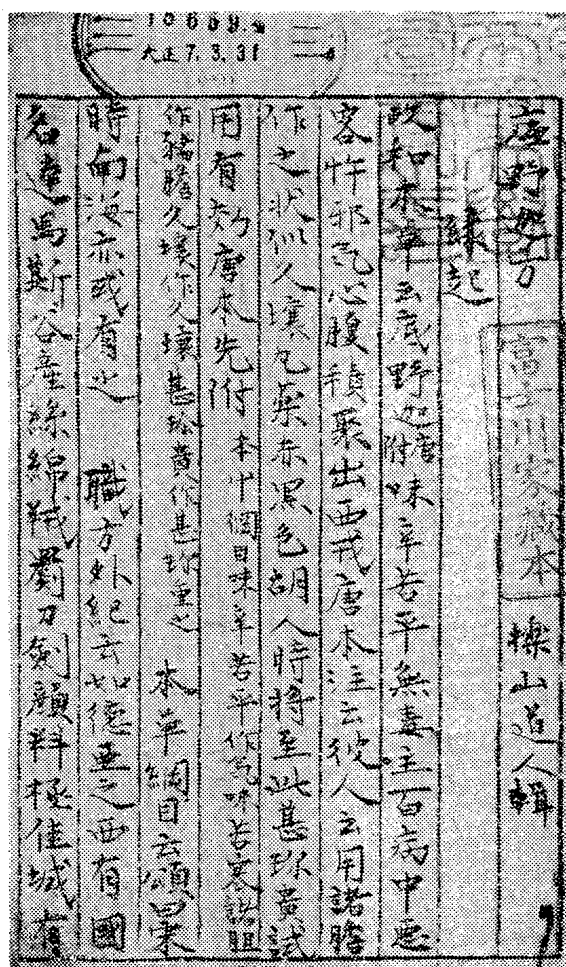
宇田川槐園（玄随、一七五五—一七九七）は武蔵淵江郷のひと、桂川甫周、大槻玄沢、杉田玄白、中川淳庵等と交り、蘭学に精進し「西洋医言」「東西病考」その他の著があった。容貌妍麗、婦人の如しと評せられたが、四十三才の壮齡で世を去り、関場博士によれば、その著述について墓碑碣には蔵して筐笥に在るとあるから、世に出なかったであろうという。<sup>(39)</sup> その「底里亜迦方」というものも、果して現存するのであるうか、浅学にして私は知ることを得ない。鈴木素行及びその「底里亜迦考」についても詳しいことはわからない。ただし、ふとした機会で昭和十七年七月刊の「京都帝国大学和漢図書分類目録、第四冊医学」を入手することが出来たが、同図書館には故富士川游博士の蔵書が寄贈されており、それらはこの目録中に「富士川本」として登載されてある。そのうちに

底野迦方 写 和小（蚤方録の内）

同 写 和中（脚氣方論に合綴）

底野迦名義 写 和中（脚氣方論に分綴）

とあるのに目がとまった。同大学図書館に請願し、その厚意により、この貴重本の写真を手に入れることが出来たのはまことに幸福なことと思っている。これらについての研究はまだ行われていないよう見受けられるが、詳細な調査には少しく時日を要するし、またそれを本稿に入れると、あまりにも長文となるので、ここにはきわめて簡単な紹介のみに止めておくことにしたい。

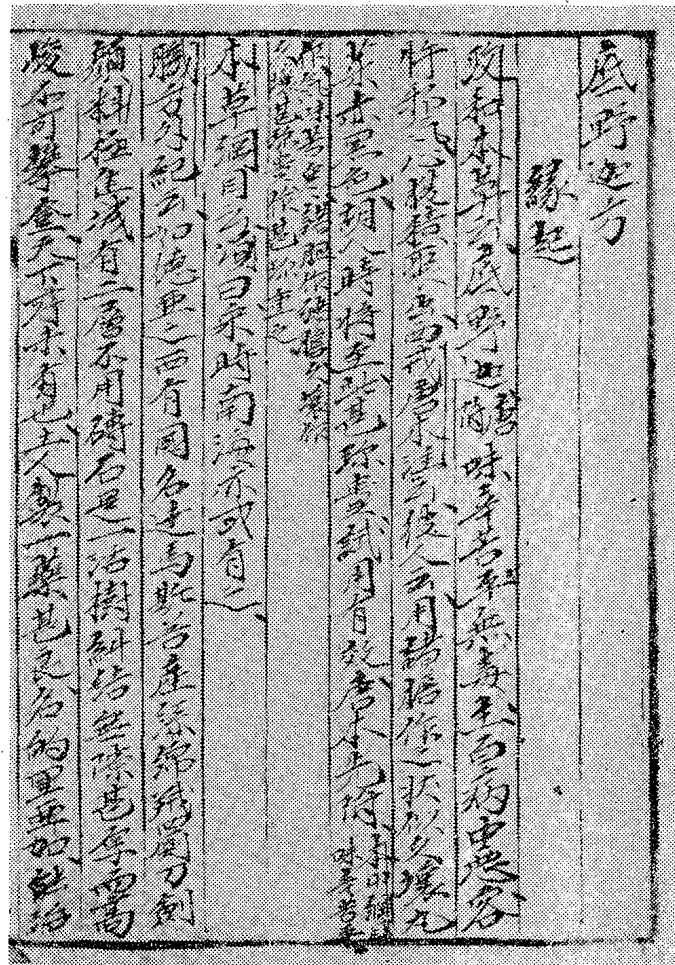


第1図 京大図書館蔵  
蜜方録所収「底野迦方」第一葉

方」が収めてある。この脚気方論は乾々堂主人編としてあり、「底野迦方」の外、「底野迦名義」「有毒集方」「知足斎徳本十九方」「種痘新編（桑田玄真訳）」「巴豆方」を収めてあり、櫟山道人の「蜜方録」とちがうところは「底野迦名義」を加えたことで、あとは全部共通の書からなっている。そして、この方に収められた「底野迦方」には標題の下に何にも記してはない。（第二図参照）

右のような理由もあって、前述の如く櫟山道人は「底野迦方」の著者ではなく、単なる編輯者として、これを他の書と併せて蜜方録を編んだ人物であろうと私は考えたい。それでは「底野迦方」の原著者は何人であろうかという問題が残る。これと宇田川槐園の「的里亜迦方」とは何かの関連があるのであるか。「底野迦方」の著者もまた江戸時代の蘭学者のひとりであったらしいことは、本文中に蘭語名がいくつも現われていることから推察できるようである。そしてこ

まず「底野迦方」は蜜方録に収められた方には「櫟山道人輯」としてある。京大目録（頁三二〇）によると、櫟山道人は「蜜方録」の輯者であって、この「底野迦方」の外「有毒集方」「徳本十九方」「種痘新編（桑田玄真訳）」「巴豆方」を併せ、これに「蜜方録」と名づけたのである。（第一図参照）恐らくこの櫟山道人は単に右五書を集めた人であって、原著者ではないであろう。もうひとつ「脚気方論」という書中にも、同じ「底野迦



第2図 京大図書館蔵  
脚氣方論所収「底野迦方」第一葉

の書中では左の如き種類のテリアカの調製法を詳しく記している。

- 一、単方底野迦
- 二、四味方
- 三、同右(別種)
- 四、同右(別種)
- 五、同右(一名停阿鉄索魯牟)
- 六、同右(別種)
- 七、同右(別種)
- 八、四味方玄岱伝
- 九、単方同

- 一〇、二味方同
- 一一、三味方同
- 一二、八味方同
- 一三、十味方同
- 一四、四味方杉田玄白伝
- 一五、五味方
- 一六、又方七味

テリアカ考(三)

- 一七、七味方
- 一八、九味方
- 一九、又方 一名阿留迷牟計世留
- 二〇、十二味方
- 二一、十三味方
- 二二、又 方
- 二三、設寧異夫留飴方(但設寧異夫留とは杜松の和蘭語名)

二四、十四味方

二六、十三味方茅山伝

二五、十五味方（第五、停阿鉄索魯牟は本稿第三頁の *diateseron* である。）

以上二十六種であるが、その中に玄岱伝とことわったものが六種、杉田玄白伝としたものが一種、茅山伝が一種だけはいっている。玄岱や茅山のことについては目下のところ詳しいことがわからぬ。また右二十六種のテリアカの殆ど全部に共通に用いられているのは蝮蛇（まむし）で、テリアカ調製にあたっては

「その皮を剥ぎ、頭尾を断ち、府腸を刮り去って、ただ心肝を留め、血穢を拭い去り、細かくきざんで石臼中に入れ、擣いて泥となし、また取出して焙乾し、再び擣いて末（粉）となす」と記している。

本稿第四章「アラブ医家の伝えたその製法」の中に十三世紀のアラブ医家ナジュムッ・ディーンによる毒蛇の処理法を紹介したが、それもやはり、頭尾を去り、皮をはぎ、腹をさいて臓腑をとり去り、清浄な淡水でよく洗いきよめ、乾かし、これに淡水をそそいでよく煮る。その肉のみをとって石の乳鉢でつぶし、煮汁でこねて錠剤にするとある。<sup>(40)</sup>

細部において若干の差はあるが、大体において江戸時代に蘭人がわが国に伝えたところと同じであることがわかる。

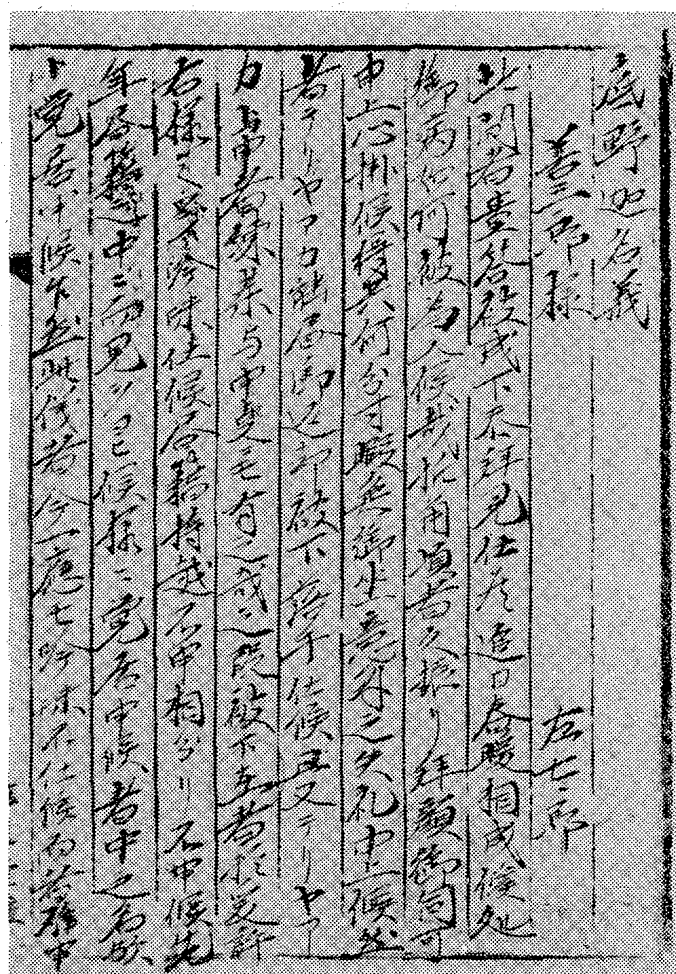
次にやはり京大図書館に所蔵される「底野迦名義」という書は僅に三葉あまりの短いものであるが、内容は興味津々たるものである。まず冒頭に左七郎という人から善三郎という人にあてた左の如き書簡文がついている。「此間者貴答被成下忝拝見仕候。追日春暖相成候処御病如何被為入候哉。折角頃者久振り拝顔御伺可申上心掛候得共、何分寸暇無御坐意外之失礼申上候。然者テリアアカ能書御返却被下落手仕候。且又テリアアカ与申者練薬与申事ニモ有之哉之段被下仰者於爰許右様之吟味仕候書籍持越不申、相分リ不申候。先年書籍ノ中ニ而見ヨヒ候様ニ覚居申候者中之名カト覚居申候。乍然此儀者今一応モ吟味不仕候而者、難申上奉存候。一説二者解毒ト申事之様ニモ相見候。又者人名之様ニモ及承申候。勿論右解毒ト申儀者後年ニ至リ称シ候事カト奉存、何レ帰郷之上得ト吟味仕、相分リ次第可申上候。右御再答申上度、如此御

坐候以上。

三月十一日

(第三図参照)

右の書簡の内容は左七郎という人から善三郎なる人に「テリアカの書」を貸してあったのを返却された際に書いたものらしく、善三郎より「一体テリアカとは練薬という意味であるか」と問うて来たのに対し、左七郎は、「よくはわからぬ。



第3図 京大図書館蔵「底野迦名義」第一葉

に寓して、その人の寿像をえがいている吉雄耕牛（幸左衛門・一七二四—一八〇〇）の一族の左七郎ではあるまいかなどとも想像される。関場博士によると耕牛の弟に吉雄作次郎という人があり、阿蘭陀小通詞助役となった。名を永純、字を

子雄といい、安永六年（一七七七）の歿である。この人の子に左七郎というものがあり、名を周房といい、寛政八年（一七九六）に歿したとある。<sup>(41)</sup> 吉雄家がテリアカの製法などに詳しかったことは、前文に引用した江戸の医人勝成裕もその「中陵漫録」の中でテリアカのことを「余蘭人に就て問い、又吉雄及訳家の秘方を尋て、ここに正す」と記していることから窺われると思う。

そこでこの左七郎を吉雄左七郎にあててみるとして、もし仮に、この推察が当たっていたとすると、その相手の善三郎は或はこれも蘭学者としてよく知られている西善三郎にあてることがしも不可能ではないのではなからうか。

西善三郎は西家の本家で通詞目附西善左衛門の子、享保元年（一七一六）に生れ、大通詞となったが明和五年（一七六八）十月十一日五十三才で世を去ったとのことである。<sup>(42)</sup> 杉田玄白の「蘭学事始」によると、この西善三郎は吉雄耕牛（幸左衛門）などとともに、わが国の蘭学を確実な基礎の上に推しすすめた先駆者だったらしく見える。これについて杉田玄白は次のような要旨のことを記している。すなわち徳川時代に西洋のことはすべてきびしく禁じられ、渡来が許されていたオランダ人でさえ、その国で使っている横文字をわが国で読み書きすることは禁じられていたので、通詞の連中も、ただオランダ語をかたかなで書きとめる程度で、口で覚えていて通弁の用を足しているにすぎなかった。ところが八代将軍吉宗公の時、長崎のオランダ通詞の西善三郎・吉雄幸左衛門と、もう一人名は忘れたが、これらの人たちが相談して、これまで通詞の家で一切の御用を取り扱っているのに、あちらの文字というものを知らないで、ただ諳氣している言葉で通弁し、いりこんだ多くの御用をどうやら弁じてつとめているというのでは、あまりに不十分である。どうにかして自分たちだけでも横文字を習い、あちらの国の本を読んでもよいようにお許を受けてはどうか。そうなれば万事につけ、あちらの事情がはつきりわかつて御用も弁じよくなるであろう。現状のままでは、あちらの国の人にだまされるようなことがあつても、そのつきとめようもないと、三人はこういういい合せて、幕府へ申し出たところ、聞きとどけられ、すぐに許可

になったということである。これこそ、オランダ人が渡来するようになってから百年余り、横文字を学んだ最初だということである。

こうして横文字を習い覚えることができるようになったので、西善三郎などは、まず「コンストウォールド」という字引をオランダ人から借り受けて、それを三通りまで書き写したということだが、オランダ人もその精力に感じて、その字引をすぐ西氏に与えたそうであると。<sup>(43)</sup>

吉雄や西などの通詞は毎年春には江戸に来て、しばらく滞在した。それはオランダ人が將軍に拝礼のため出府するのに付き添ってであつた。將軍吉宗は御医師野呂元丈、御儒者青木文蔵の二人に命じ、通詞たちが江戸にいる間に、これらについてオランダ語を学ばしめた。数年かかって、やっと初歩の手ほどきをうけ得たにすぎなかったが、とにかく、これが江戸でオランダのことを学び始めた最初であつた。<sup>(44)</sup>

明和三年（一七六六）の春、例年のごとくオランダ人が江戸拝礼に来た。そのころ、杉田玄白の宅へ、豊前中津侯の医官で、青木文蔵の門に入ってオランダ語を学んだこともある前野良沢という人が訪ねてきた。これからオランダ人の宿へ行き、通詞に会ってオランダのことを聞き、都合によってはオランダ語などもたずねようと思つていと語つた。玄白もそのころは年若く、何でもやってみたくなるころだったので、同行をこうと、良沢は快諾し、一緒にオランダ人の泊つてゐる宿へ行つた。

その年は大通詞としては西善三郎という人が来ていた。良沢の紹介で、玄白がオランダ語を学びたいという希望をのべると、西は、異国の言葉など学ぶのはいかに困難な業であるかを詳しく説いて思いとどまるよう忠告した。玄白は、それをもつともと聞き、そんな面倒なものをやりとげる根気はないし、そんなことで徒に日月を費すのは無益なことと思ひ、無理してまで学ぶつもりもなかったので、そのまま帰つてしまつた。<sup>(45)</sup>



こうして一度びは思いとどまったものの、その翌年か翌々年（明和四年か五年）、カピタンのヤン・カランス Jan Crans、外科医バブル George Rudolf Bauer 等が江戸に来たが、大通詞吉雄幸左衛門（号は耕牛）がこれに付き添っていた。幸左衛門はバブルについて学び、外科の名手としてすでに名声があり、多くの門人をもっていた。杉田玄白もこの年、江戸の旅宿に幸左衛門を訪ねてその門人となり、毎日その宿に通って、その術を学ぶのであった。<sup>(46)</sup>

一七六八年に五十三才で歿したこの西善三郎と、一七九六年に世を去った吉雄左七郎（年寿不明）とは相当に年齢はちがっていたであろうが、かなり時を同じくして生きたものと見て差支えないと思われる。前掲左七郎の書簡によると、三月十一日にしたためたとあるから、あたかもオランダ人や付そいの通詞等の江戸に出ているころであり、かつまた「書籍持越不申」とか「何れ帰郷之上とくと吟味仕り、相分り次第可申上候」などという言葉のあるところから、二人とも長崎を離れ江戸に出て来ている際のものかと想像され、かつ善三郎という人の方は病中だったごとく見える。

次にこの「底野加名義」の本文であるが、これもまた誠に興味深いものである。

勿搦祭亜的里亜加（句読は著者による）

勿搦祭亜国パラディス地名ニ於テ名高ク古キ製薬ノアントウニヨラハアルリス人名ト云ヘル者製スルの里亜加ノ一方高敬ス。会谈所ノ医師其外製薬業ノ衆調合ノ為ニ集メラレテ明王ノ眼前ニ於テ製ス。吾的里亜加療用功能ヲ誓約スル事下文ノ如シ。

吾力の里亜加諸毒ニ良シ。是ヲ用ルニハ其分量桃仁ノ大サ葡萄酒或ハ諸薬汁諸薬水ヲ以テ之ヲ用ヨ。的里亜加ノ一方而已ヲ用ヒハ、即時ニ水湯ヲ飲ヘシ。毒ニ当ルニハ外療ハ体上ニ塗り、内療ハ二時ヲ隔テ三四度服スヘシ。猶安体ヲシメンニハ翌日モ右ノ如ク是ヲ服ス。脈穴胸ノ上、鼻ノ下ニ塗ヘシ。

毒虫毒蛇毒犬ニ食レタル人此的里亜加ヲ貼ヘシ。貼テ後乾カハ又新ニ貼ヘシ。

的里亜加悪キ氣候鬱湿ノ氣、霧露之氣又ハ時疫ノ証ニ酔ヲ雜エ、朝空腹ニ是ヲ服ス。胸上鼻下脈上ニ塗ルヘシ。此ノコトクスレハ伝染ノ病ヲフセキ、又悪病ヲ看病スル人はヲ用ヒハヨク其病ヲ除ク。脾胃ヲ強シ、頭ヲカタクシ、眼ヲ明シ、心ヲ悦シメ、能ク心氣ヲ順通ス。人々各誠実トス。敢テ買売ヲ広メ進ルニハ非ス。吾カテリアアカノ誠アル人書記ス。早服桃人ノ大サ服スル時ハ寿ヲ長生ス。頭上ノ氣ヲ下シ、寢所ニ入ル以前桃人ノ大サ是ヲ用ユル時ハ能眠ヲナシ、下血吐血ニ甚良ク、又肝脾肺之閉塞ヲ治ス。

此藥男女各良功アリ。懷婦小兒ニ功アリ。最モ小兒ハ少ク用ユヘシ。

馬牛其外角アル獸如何ナル病タリトモ朝空腹ニヒ一ツ程強テ葡萄酒ニテ雜エ用ヒバ奇妙ノ藥也。誠考一記ス吾的里加獸ニハ三度用ヒヨ、病一日ニ愈ユ。兩日ニ不愈必三日ニ愈ユ。又獸ノ病ヲ防シカ為メ是ヲ用ヒテ病不生ヲ勘ヘ知レリ。

吾的里亜加ヲ贖スル者爰ニ多シ。買ヒ求ル人ヲ不偽カ為ニ知ラシム。吾テリアアカネバリ強ク薄カラス。吾自筆ノ藥能書無テ曾テ一罐モ出シ送ルコト無シ。吾レ勿擲祭亜国ハラティス地名ノ製藥ノ業アントウニヨラハアルリト人名ニ書ヲ送ル人アリ。療用ノ為メ吾カ的里亜加ヲ好ム人アリ。又商売ノ為ニ誂ヘ求ル人実ニ欺ク人アリ。是利分ノ為也。他人ノ商ハ惡品ノ物ヲ甚タ下直ニシテ輒ク調サル事ヲ考エ知レリ。故ニ惡品ヲ買求ト云モ、吾藥求ル人ヲシテ勞屈セシメス。唯タ唯タ吾的里亜加ハ至極上品ニ君ヲ恐テ之ヲ製ス。

勿擲祭亜国ノ百七十五年アントウニヨラハアルリイ印

「

右は勿擲祭亜国ではテリアカを調製するには国王の前に会談所の医師たち、薬剤師たちが集って行うこと。およびその国の伝統ある製藥の家柄であるアントウニヨラハアルリイ（ス）というもののテリアカ機能についての誓約の言葉などである。恐らく当時舶載されたテリアカに添付された効能書からの翻訳であろう。きわめて稚拙な訳文で、発音や意味も

どこまで正確に写したのか保証し難い。勿搦祭亜国はおそらく Venetia の音写であろう。前文でも引用したが、イタリアのカステイリオニの医学史によると、中世のイタリアでは五十七種の材料をあわせてテリアカを調製したが、「その作業はあくまでも難しく、徹頭徹尾特殊の配慮を必要としたので、十六世紀のヴェネチアでは長官（ドッジのことであろう）や医師たちや薬剤師たちの代議員（des conseillers des médecins et des pharmaciens）の面前でなければ作らなかつた」と記してある。<sup>(47)</sup>「底野迦名義」に勿搦祭亜国では「会談所の医師其外製薬業の衆調合の為ニ集メラレテ明王ノ眼前ニ於テ製ス」とあるのは、よくその事情と符合するよう思われるが、この場合「明王」とあるは、ドッジのことと解してよいであろう。当時、ヨーロッパ全土でテリアカの需要が多く、ヴェネチアはそのため多額の取引をし、この薬品の利を独占しようと努めていたことも前文に述べた如くである。（本稿頁四参照）

漢方医家黒田邦雄氏の文により落語「がまの油売り」の中に四六の墓のたたりと流す油の中にテリアカやマンティカをまぜるといふ文句があるということも知った。<sup>(48)</sup>

更に私が昭和三十七年六月、東洋文庫においてテリアカの伝流についての研究を発表したところ、同年七月八日づけで薬学者松岡徹正氏から、大体左の如き内容の御教示を賜わった。いま勝手ながら、その大要を発表させて頂くと「昭和二十年発行の『家庭薬全書』という書は当時政府から製造を許されていたいわゆる売薬の全部を収蔵したものである。この中にテリアカを製造している実例として左の二会社があてである。第一は鳥取県製薬株式会社、第二は滋賀県製薬株式会社で、前者におけるテリアカ処方、アルコール（二〇匁）グリセリン（二〇匁）桂皮（五匁）丁子（二匁）竜胆（五匁）黄連（二匁）甘草（四匁）薄荷脳（七匁）サリチル酸（〇・五匁）朱（二匁）蜂蜜（四〇匁）紫檀（五匁）木香（四匁）小茴香（二匁）檳榔子（二匁）香附子（三匁）当薬（二匁）牛胆（三匁）烏梅（五匁）良姜（三匁）黄芩（四匁）人参（三匁）竜腦（二匁）弁柄（一匁）飴（一〇〇匁）以上二十五品。後者に於いては桂皮（一五匁）甘草（四五匁）竜腦

(二・五〇〇) 酸化鉄 (七・五〇〇) 薄荷腦 (四・五〇〇) サリチル酸 (一・五〇〇) 糖蜜 (三〇・〇〇〇) 飴 (一二〇・〇〇〇) 良姜 (八・〇〇〇) 焼酎又はアルコール (一六・〇〇〇) 以上十品。

松岡氏によると、右の二会社はいずれも同氏が戦時中勤務していた家庭薬統制組合の会員であり、当時の国策により、各製薬業者が処方を開示し、それらを集めて右記の書が出来たものである。故に少くともその頃はまだテリアカは作られていたものと思われるのである。また前に薬務課長として鳥取県及び長崎県などで勤務されたことのある原一郎氏が松岡氏に語ったところによると、テリアカはまず長崎に伝わったらしいが、現在同地にはそれについての文献記録は見あたらぬ。また鳥取県では原氏が任中もテリアカが用いられており、同氏は昭和三十年頃、日本薬剤士協会誌にその紹介記事を發表されたことである。

右の二製薬会社のテリアカには昔のテリアカには必ずはいっていた毒蛇の肉が用いられていない。しかし、その外の薬品類にはギリシア、アラビア、ヨーロッパ諸国などで製せられた昔のテリアカと共通のものがいくつも残されていることに興味を惹かれる。

## 結

## 語

ギリシア人が發明し、オリエント地方にもひろまり、早く隋唐時代の中国にももたらされ、奈良・平安朝時代のわが国人にも知られていた解毒の妙薬テリアカは、イスラム時代の中東地方で流行し、いわゆるアラビア医学界の流行児となつた。これがまた更にアラビア医学のヨーロッパ普及にともなつて泰西諸国で重宝がられていたが、十六世紀以降、ポルトガル人により、ついでオランダ人によって再びわが国にもたらされた。江戸時代の蘭学者たちもまたこのものについていくつかの著述を残している。この薬はヨーロッパでは十九世紀末ころまでは少くも生命を保つたらしいが、わが国でも<sup>(49)</sup>

少くとも昭和二十年ころまでは一部で製造されていた形跡がある。インドやイスラム諸国などを探ったならば、恐らくは現在とて民間薬として使用されているかと思われる。こうして二千年近くも命脈を保ち、文化の交流に乗って伝播を続けたのであるが、逆にこのテリアカなる薬の流布の経過をたどっていくと、各時代の文化が、あるいは高きより低きに流れ、あるいは相互に交流したありさまを観察する一助ともなるように思われる。

徒らに多数の珍しい薬物を練り合わせたこのような薬が果して實際上どれほどの効能があるか甚だ疑わしく、もろもろの中毒や、人間性の残間しさからくる毒害などを恐れるあまり生じた一種の迷信的薬品のひとつとも受けとれるのである。すでに西紀一世紀に大プリニウス *Gaius Plinius Secundus* (二三―七九) がその自然誌の中で、いかにテリアカが馬鹿馬鹿しいものであるかを痛烈に罵って次の如く述べている。「豊富な想像力によって調製された薬をテリアカ *Theriac* と呼んでいる。このものは六百種もの（これはプリニウスの誤解で実際は数十種）原料でつくるのだが、大自らはこれら多数の薬物をひとつひとつで用いても病を癒やすことが出来るようにしてくれているのである。ミトリダテスの解毒剤（アンドロマコスのテリアカの先駆をなしたものといわれ、ガレノスによれば四十四種の、ケルスス *Aulus Cornelius Celsus* によれば三十六種の薬品を練り合わせてつくるといふ）は五十四種の原料から調製されるが、そのどれもが同じ目方ではいれられず、しかもそのうちのあるものは一デナリウスの六十分の一の重さだけしか加えられないのである。一体どこの神様がそんな指図までなさることがありうるであろうか。人智の精密さとしてそこまで行くことは出来ない。これはまさに技術の詐欺である。いかさま学問の奇怪なみせびらかしなのだ。<sup>(50)</sup>」

それにもかかわらずこの煉薬はユーラシア大陸の津々浦々にひろまり、遠く絹の道や南海路を伝わって極東地方にも来れば、熱砂のアラビアやヒマラヤの南、インドス・ガンジスの沃野にももたらされた。そして学芸・社会の驚くべき進歩や変化をよそに悠々として二千年近くの長年月を生き続けたのである。しかも、当初にギリシア人が地中海岸で工夫した

ころの製法や材料が、広汎な伝播地域の到るところで最後までかなり忠実に伝承されていたとはまことに驚くべきことである。そこに人間の本性を窺う何等のヒントがひそんではいないだろうか。人類文化の一方面が窺えはしまいか。筆者はこの論考の筆を措くにあたり、このような不可思議の感の胸裡に湧き起るのを禁じることが出来ない。

# 註

- (1) Mackinnay, Loren C., *Early Medieval Medicine with special reference to France and Chartres. (The Hideyo Noguchi Lectures)* Baltimore, the Johns Hopkins Press, 1937, p. 63 & p. 135.
- (2) *Ibid.*, p. 31 & 133.
- (3) A. Castiglioni はもとイタリアの Padua 大学教授、のち米国の Yale 大学に移る。その医学史 *Storia della medicina*, Milano は E. B. Krumphaar による英訳され一九四一年ニューヨークで公刊された。仏訳本は J. Bertrand & F. Gidon の手になり、*Histoire de la Médecine* と題し一九三一年にパリで刊行された。その他にスペイン語、ポルトガル語、ドイツ語などの訳本もあるようである。
- (4) A. Castiglioni 医学史、一九四一年、ニューヨーク刊 英訳本、pp. 383-4. 同、一九三一年、パリ刊仏訳本 p. 311.
- (5) 同右、仏訳本、pp. 530-531.
- (6) Doughty, Charles M., *Travels of Arabia Deserta*, London 1936, 2nd vol., p. 27.
- (7) *The Legacy of Islam*, London 1931, pp. 345-354.
- (8) Haly Abbas はイランの人、本名は 'Ali ibn al-'Abbas al-Majusi、九九四年頃歿。その「王書」*Kitāb al-maliki* は Avicenna の *al-Qānūn* と並び称せられ、*Liber Regius* という表題で一四九二年にヴェネチアで、一五二三年にはリヨンで刊行された。(Cf. C. Elgood, *A medical history of Persia and the Eastern Caliphate*, Cambridge 1951, pp. 155-158)
- (9) *Legacy of Islam*, p. 351. (第七一八行)
- (10) *Ibid.*, p. 353.
- (11) Sami Khalaf Hamarneh & Glenn Sondecke, *A Pharmaceutical view of Abulcasis al-Zahrāwī in Moorish Spain*, Leiden 1963, p. 16.
- (12) *Ibid.*, p. 14.
- (13) *Ibid.*, p. 34.
- (14) *Ibid.*, p. 40. p. 68.

- (15) Ibid., pp. 29-30.
- (16) Ibid., p. 30.
- (17) Colloquies on the simples & drugs of India, by Garcia da Orta, translated by Sir Clements Markham, London 1913 pp. 28-31.
- (18) Ibid., pp. 159-160.
- (19) Ibid., p. 145.
- (20) 富士川游、日本医学史、昭和十六年、東京、頁二六一。
- (21) 関場不二彦、西医学東漸史話、昭和八年東京、上巻、頁五〇、五二、五四。
- (22) 明治前日本薬物学史、(日本学士院日本科学史刊行会編) 昭和三年刊、赤松金芳博士執筆の分、第一巻頁四六。
- (23) 日本医学史、頁二六四。
- (24) 関場、西医学東漸史話、上巻、頁六二。
- (25) 同右書、頁二一七—一八。
- (26) 同右、頁二〇七。
- (27) 同右、頁二二七。
- (28) 同右、頁三七五。
- (29) 日本古典全集本、昭和三年刊。頁一〇五—一五六。
- (30) 勝成裕「中陵漫録」明治四十四年国書出版協会発行・巻十、頁二二—二二二。(明治四五年版、珍書文庫随筆大観第五巻も同じ)
- (31) 明治前日本薬物学史、第一巻、頁七九。
- (32) 同右、頁一一一。
- (33) 清水藤太郎「薬物需給史」(明治前日本薬物学史巻一、頁二一七)
- (34) 同右、頁二一八。
- (35) 赤松金芳「明治前日本薬物学史」頁一一—一一三。
- (36) 清水「薬物需給史」頁二三九。
- (37) 関場「西医学東漸史話」下巻、頁五七—五八。
- (38) 医史漫録、昭和五年四月、頁二〇六。
- (39) 西医学東漸史話下巻、頁一〇七。
- (40) テリアカ考(一)頁二三。
- (41) 関場「西医学東漸史話」上巻、頁四三五。
- (42) 同右、頁三三〇。
- (43) 杉田玄白「蘭学事始」ただし昭和三十九年刊、緒方富雄博士の現代語訳本、頁二十一—二十三より大要をとる。
- (44) 同右書、頁二十七—二十八。
- (45) 同右、頁三十六—三十八。
- (46) 同右、頁四十二—四十三。
- (47) A. Castiglioni, Histoire de la Médecine, traduction par J. Bertrand et F. Gidon. Paris 1931, p. 311.
- (48) 新聞「イスラーム」第一九三号(昭和四〇年一〇月二六日)第四面。黒田邦雄「アラビアの医術」読後感。
- (49) テリアカの調製法はヨーロッパでは一八八四年版の薬局

方にはなお掲載されていたところがある。Cf. Pline l'Ancien, Histoire Naturelle, Livre XXIX, traduit et commenté par, A. Ernout, Paris, 1962, p. 75, §24, note. 1.

(25) Pline l'Ancien, Histoire Naturelle, texte établi, traduit et commenté par A. Ernout, Livre XXIX,

Paris 1962, pp. 27-28, paragraphe 24.

#### 追記

「なお、第一一、第一二節に関係した研究として、Heinrich Schipperges, Die Assimilation der Arabischen Medizin durch das Lateinische Mittelalter, Wiesbaden 1964. が充実したものであるが、本稿校正中入手したので、本文中には使用できなかった。